

随 想

良い英文を書くために —論文を英語で書くこつ—

氏 家 信 久*

1. 主 語

“Après nous le déluge.”—M^{me} de Ponpadour

これから英語の話をしよというのに、いきなりフランス語の引用など持つて来てはなはだ恐れ入るが、この言葉の英語訳は、完全に遂語的に行けて、“After us, the deluge.”となる。そして、予言的棄科白の中で最も有名なこの一言の意味は、“(我々はこんなに派手にしたい放題のことをするから、)我等の後に(ノアの)大洪水が来(て、すべてを破滅させ)るであろう。”とのことである。

実は、私はこの言葉は、太陽王とうたわれ、近代ヨーロッパ史で最も王様らしい王様であつたルイ十四世のものと思ひこんでいた。本稿を執筆するに当たり、物の本を調べて見たら、本当は彼の筆頭寵姫であつたポンパドゥア夫人のものを知つて少し困つてしまつたのである。

それと言うのは、この中で nous(us) という語の内容が、ルイ十四世の発言とポンパドゥア夫人の発言とでは違うからである。つまり、夫人だから nous(us) = 我々、すなわち第一人称複数でよいのだが、これが王様だつたら nous(us) = me = 朕、すなわち第一人称単数として訳出しなければならないのである。

どうしてこんなことになるか、なぜ一般人にとつては、最高位の貴族に至るまで we は複数の「私達」なのに、王様だけが we で「私」を表現するのかと言うと、それは王様という者は常に後に神様を背負っているからで、「天上の支配者たる神」と「その地上における代表者たる私」とで we と称するからであると聞く。

さて本題に入つて、論文、特に自然科学、応用科学の分野である理工系諸科学の研究論文で、第一人称単数の I や「私」を主語に置いて書かれているものは、全くと言つてよいくらいお目にかかれぬ。それは、この種の論文には客観性が厳しく要求されるからで、その故に主観性そのものである第一人称単数は、主語としてそぐわないからである。この点、哲学や文学などの人文科学や、あるいはまた、同じ自然科学系でも、論文では無く報告の場合など、主観性、直観性こそが生命であるものとは立場が根本的に違うことを考えれば、容易に了解されると思う。

一方、主語を we で書かれている科学論文は世に数多

く存在する。まるで同じ第一人称でも、単数はだめで、複数ならよいとされているかのように見える。しかし、それはおかしい。一人なら主観的で、二人なら客観的になれる訳は無い。第一、著者が何人であろうと、皆気をそろえて同一の論文を作り上げている以上、それは単一人の人格、言つて見れば法人のようなものでなければなるまい。またその逆に、著者が一人なのに we で書いてある論文もあることに気付かれておられるであろう。

実は、これは「著者である私(達)」と「読者である貴方(方)」を統合して we と称しているのであつて、これを「神と私」である king's we に対して editor's we または writer's we と呼ぶ convention なのである。つまり、科学論文で we assume; we obtain; we conclude などというのは、「著者である私と、読者である貴方との間の約束事として、今ここにかくかくの仮定を設けよう。」とか、「読者も当然納得されるであろうように、ここにしかじかの結論が論理的に導かれる。」との意味であつて、これで客観性を保っているのである。

従つて、この convention によつて we を使う場合は、常に現在時制か未来時制で書くのが原則であつて、これを不用意に過去にして we assumed; we observed; we concluded などとすると、これはもはや読者の賛同が得られる埒外に出てしまい、著者自身の個人的行為や経験を一方的に読者に押しつけることになる。

この他、英語では患者(大人でも子供でも)における看護婦とか、良家の子女における家庭教師とかいつた人達が、これとは多少違つた we convention をよく使うようである。すなわち、この種の人々が、“ドクターの(あるいは、母上の)命令だから、we must take this medicine,”と言ふ時、その苦い薬を飲むのは患者(または、世話をしている子供)だけであつて、言つている当人は決して飲まない、つまり we = you なのである。医者と患者の間に立つて、両方の味方をしなければならぬ看護婦の立場としては、なかなかうまい表現法と言ふべきであろう。(最近のイラン問題における我国の外交も、こんな風には行かないものであろうか。)

上記の余談も含めて、we convention は話をやさしくしようとしたり、ニュアンスとして人間味を入れようとしたりする場合によく使われるようである。この故か、教科書、解説書、入門書の類には editor's we で書かれ

* 石川島播磨重工業(株)技術研究所 Dr. Eng.

ているものが多い。

最近の米国論文には第一人称複数の *we* が非常に増えて来ている。しかし、第一人称単数の *I* は依然として皆無であるし、またさすがに英国系論文での *we* は、いまだにこの *editor's we* になつている。趨勢はやさしい方へ、七面倒臭いことは一切御免の方へ向かつていることは確かであるが、それは生きた英語を国語としている連中の中にのみ許されること。我々はその後からずつと遅れて、国際語としての英語（評論家の小田実氏によればイングリッシュとエスペラントでイングペラント）の枠中に留まり、その形式を守るべきである、と私は考えるがいかが。

ま と め

(1) 少なくとも理工系の研究論文では、著者が複数だからといって *we* で書いてよいといつたものではない。(それならば著者が一人の時、*I* で論文を書くだろうか。)それは論文の内容に主観性を排し、客観性を保証するためである。

(2) 主語を *we* とする時は、それは *editor's we* の *convention* によつて客観性を保持しているのであるから、現在時制または未来時制で書く。過去形（現在完了形はその記述の内容による）で書くと、それは著者自身の過去における行為、経験の表明となつて読者を排除してしまうから、この *convention* はもはや成立せず、客観性は失われてしまう。

(3) 従つて、研究論文で著者の主張や経験を強く出したい時は、*the (present) author(s)* を主語に建て、*he (they)* で受けるとよい。*Editor's we* は、教科書、解説書、総説向きである。

2. 関係代名詞

This is the house that Jack built.

This is the malt

That lay in the house that Jack built.

This is the rat

That ate the malt

That lay in the house that Jack built.

—マザーグースの唄から—

英語は簡潔性と論理性に富んだ言語であると言われる。ゼロとイチしか知らない無限馬鹿のコンピュータにあれだけの仕事をさせられるのは、FORTRAN や COBOL のような言語が開発されたからで、それらがすべて英語から生まれて来たのも、全くの偶然ではあるまい。

さて、その英語における論理性の支柱の一つになつているのが関係代名詞であつて、研究論文でもつばら問題になるのは *that* と *which* であろう。

どなたでも御存知のように、事物、事象を受ける関係代名詞としての *that* と *which* には二つの機能がある。

この二つの機能に対して、文法学者は本当に様々な名を与えているが、本稿では私流に「定義の機能」と「説明の機能」と呼ばせていただく。

定義機能とはある事物、事象を特定化するもので、引用した童謡（もつともこれは調子よく唱えるもので、節をつけて歌うものでは無さそうだが）は、この非常によい例である。例えば、第3句では、

“これが Jack が建てたという特定の家の中に貯えられて（いて、家人がビールを醸そうと楽しみにして）いたという特定のモルトを喰べてしまつたという特定のネズ公である。”

と、鼠が三重に定義されている。

この場合、つまり定義の関係代名詞として使う場合、*that* と *which* は等価であるから互換性があり、引用例中の6つの *that* のどれ一つとして、*which* で置き換えられないものは無い。どちらを選ぶかはもつばら個人の好みと口調や語勢、つまり多分に文学的な問題であつて、よく *which* の方がより書き言葉的であり、*that* の方がより話し言葉的であるとされているが、FOWLER¹⁾ はそれは誤解だと言つているし、また私には、より明確に定義したい時、英米人は *that* を意識的に使つているように思われる。

いずれにせよ、説明の場合、すなわち関係代名詞と、それがかかる先行名詞（または名詞句）の間にコンマがある場合には、*that* は使えない。二十世紀初頭頃まではまだ“*that*”も使われていたが、現代英語に“*that*”の形は無いのである。例えば、

(1) This is the house that Jack built.

(2) This is the house which Jack built.

(3) This is the house, which Jack built.

において、(1)と(2)は全く同等で、“(余人ならぬあの) Jack が建てたその問題の (the) 家”と家を定義し、特定化しているのに対し、(3)では“これがその問題の (the) 家です。ところで、これは Jack が建てたものなのですが”と補足説明を与えているのである。つまり(1)と(2)では Jack が建てたことに意味があるから全文一体でなければならず、一方(3)ではコンマまでの前半で必要にして十分な情報の伝達は終えてあり、更に、コンマに「ところで」の気持ちを持たせて、追加情報を提供しているのである。

もう一つ例を挙げよう。これは Sir Ernest GOWESS が名著 *The Complete Plain Words*²⁾ の中で使つている例文で、第二次世界大戦中の某英連邦国空軍学校用教科書からの引用とのことである。

- (4) Pilots, whose minds are dull, do not usually live long.

もちろん、原著者が意図したのは、“飛行機乗りの中で精神がたるんでいる連中は、(早く敵に打ち落とされてしまうから) 長生きしないぞ。”——つまり定義の方であつたに違いない。それがこの文では、whose 句をコンマで切つたために、whose が説明の関係代名詞になつてしまつているから、“飛行機乗り達は、彼等の精神は(一般的に) たるんでいるものなのだが、普通長生きはしない(ものである).” としか読めないのである。Sir Ernest はこれを評して、“2つのコンマが、自明の理を侮辱の弁に変えてしまつた。”と言つている。私なら、テンで話が違ふと言うところである。

この種の使い分けの妙が、英語にその簡潔性と豊かな表現力を与えている。しかし、文学的な美しさよりも情報伝達の正確さを求める我々にとつて、表現方法の自由度は有難迷惑である——ああも言える、こう言つてもよい、と言われても困るばかりのことが多い。

それならばどうすればよいか。私の提案は次のとおりである。

ま と め

(1) 関係代名詞を使う時は、「定義」、「説明」のどちらが目的であるかをきちんと認識する。

(2) 定義の場合には必ず“that”を使う——“which”は定義用には使わない。

(3) 説明の場合には必ずコンマで切り、“,” which “, whose” のようにする。

3. 分 詞 構 文

Looking back from our present historical vantage point, the Japanese can be seen to have had the steam engine more than half as long as British or Americans.

分詞(現在分詞または過去分詞)を先頭に立て、二つの独立した内容の記事を、その同時性(または平行関係)あるいは連続性(または因果関係)によつて一つのセンテンスにまとめてしまうこの構文は、簡潔さ、力強さ、そして美しさにおいて正に英文の華と言つてよい。

この有用な作文法を使う場合の原則は、——理工系の論文ではもつぱら現在分詞の使い方であるが、——主文の主語と、先行する分詞の主語が一致しなければならぬと言ふことである。そうでなければ、二つの記事が一文において統合されているとは言えず、先行させた分詞はぶらぶら(dangling (or unattached) participle)になつている、不注意な作文であると、文法学者(の中のウルサ型)の攻撃を喰ふことになる。

引用文はその例で、まず主文の主語が the Japanese

であるのに対し、先行分詞 looking back の主語、つまり look back する人は we (前述の editor's we) であつて、主文の主語と一致していない。つまり、looking back は dangling しているのである。

分詞構文はラテン語系の諸言語に共通な特徴であつて、特にロマンス語*では多用されるようである。英語での特異性は、動詞の現在分詞と gerund (動名詞) が全く同形の -ing であることで、ここに面白さとやつかひさが同時に発生している。その混乱の一例は、動詞の性格を強く残している現在分詞から、動詞とは全く別個の品詞である前置詞へと進化してしまつた一群の現在分詞が存在する事実である。それは regarding, considering, owing to, concerning, failing, following などで、これらは本来の現在分詞と、新たに獲得した前置詞との両用に使われるから注意を要する。中でも considering について、Sir GOWERS は次の例を挙げている²⁾。

- (1) Considering the attack that had been made on him, his speech was moderate in tone.
- (2) Considering the attack on him beneath his notice, his speech was moderate in tone.

同じ considering** が使つてあるが、(2)では“～の割には”の意で、for (for his age) と同等の前置詞であるのに対し、(3)では“彼に向けられた攻撃はまともに注意するに値しないと(彼は)考えて”であるから、これは現在分詞である。そうすると、(3)は主文の主語(his speech)と一致していないから、considering は dangling してしまつている。私だつたらこうする。

- (2') Considering the attack on him beneath his notice, he made his speech moderate in tone.

同様に、文詞構文における主語の一致だけを問題にするならば、首記の引用文は次のようにしたらよい。

Looking back from our present historical vantage point, we can see that the Japanese have had……

上で私は“だけを問題にするならば……”などと歯切れの悪いことを書いてしまつた。それは、実はこの一文は、駐日大使でもあつた Harvard 大学の REISCHAUER 教授の名著 *The Japanese* からの引用であるからである。

* 伊、西、葡、仏語など

** この considering という語は、ISIJ 論文では非常に多く誤用されているが、それは次の機会の話題としたい

もちろん、私などがライシャワー先生の文章を添削するなど、おこがましくてできるものではないということもある。しかし、それよりもなお、英語は生きている言語であるからどんどん変わって行く、——教授ほどの方がこういう使い方をされるのだから、*looking back* が上記の *considering* のような前置詞扱いを受ける日も遠くはあるまい、——その非常によい例がここに示されているように私には思えるのである。しかし、英語を変えるのは英語と共に生きている彼等のみが持つている権利であつて、我々外国人は、やつぱり確定された英語——それが旧式であつても——の範囲に留まつているべきであらうと私は考える。

ま と め

(1) 分詞構文 (動詞の現在分詞使用の) は、A, B

の独立した二事象が、“Aをしながら”、“Aをする一方で”、“Aをした帰結として”、“Aをし終わつた次に引続いて”“Bをする”といった同時性 (または並行関係) あるいは連続性 (または因果関係) で統一され得る時に限定して使う。

(2) Aの主語とBの主語は一致させる。

(3) いまだ前置詞化が一般的に認められていないものは現在分詞として扱う。

文 献

- 1) H. W. FOWLER : A Dictionary of Modern English Usage, 2nd ed., (1965) [Oxford University Press]
- 2) Sir E. GOWERS : The Complete Plain Words, (1971) [Penguin Books Ltd.]